

テキスト・現実・価値
——エドワード・サイードにおける文化研究の両義性——
橋本 直人（神戸大学）

ポストコロニアリズムは、文学的テキストを中心とする文化研究を主要なフィールドとして展開してきた。そして、西洋の古典的テキストの分析を通じ、植民地や被植民者に関する、またその対立項としての「自己」＝西洋に関する文化的な表象がいかにして植民地支配を先導し正当化してきたか、その意味で文化が帝国主義的支配・抑圧構造とどれほど密接な共犯関係にあるかを明らかにしてきた。このようなポストコロニアリズムの展開は、伝統的な文化研究に対してまったく新しい地平を開いたと言えるだろう。

その一方で、ポストコロニアリズムに対する批判もまた、しばしばその文化研究のあり方と密接に関わる形で提起されてきた。たとえば、植民地や被植民者に関する文化的表象の本質主義に対するポストコロニアリズムの批判が反植民地運動のナショナリズムの拠り所をも無力かしてしまうのではないか、という批判、あるいは、ポストコロニアリズムが帝国主義的支配構造への批判をテキスト内の分析で代替することで、テキスト外の「ハードな」現実的支配・抑圧の構造がかえって見えなくなってしまうのではないか、という批判は、その代表的なものであろう。

このように見てくると、ポストコロニアリズムにとって文化研究のもつ両義性がきわめて重要な問いとなっていることが見て取れるだろう。そこで本報告では、エドワード・サイードの思想を検討することで、この両義性の一端について考察したい。なぜなら、テキストの詳細な分析を通じた文化と支配・抑圧との関係の暴露という手法や、文化的表象の本質主義に対する批判、さらに帝国主義文化に対する抵抗の可能性の問題など、文化研究の両義性をめぐる諸問題は、ポストコロニアリズムの「古典」たるサイードのテキストのうちに見出しうるし、それゆえにサイードの検討はこの両義性の問題を考察するための格好の手がかりとなりうるからである。

特に、本報告では以下の2点を中心に検討を進めるつもりである。

(1) 帝国主義文化の閉域とその「外部」

サイードは、「自己」(＝西洋)／「他者」(＝オリエントおよび被植民者)の二分法に基づく文化的表象が同語反復的に強化されることで「他者」の現実が隠蔽され、その結果として西洋の帝国主義文化は「他者」に脅かされることなく自己完結性のうちに安らぐことになる、というメカニズムを分析する。こうした分析の基礎として、サイードは現実を構成するものとしての言説の概念を用いるのだが、その結果、帝国主義文化の「外部」にある「現実」がかえって見えにくくなってはいないだろうか。

サイード自身は文学テキストとその「外部」の植民地支配の現実とのからみ合いを指摘しており、その意図として「テキスト還元主義」に陥っているわけではない。だが、

言説概念に基づく彼の帝国主義文化分析は、現在のポストコロニアリズムが抱える問題の原型と言えよう。こうした観点から、テキストないし文化とその「外部」の「現実」との関連をサイードがどのように考えていたのかを検討したい。

(2) 抵抗としての「遡航」と文化的価値

西洋帝国主義文化の同語反復的な自己完結性に対し、サイードが『文化と帝国主義』の中で抵抗の契機と位置づけたのが「遡航」の概念である。すなわち、帝国主義文化に支配された被植民者の知識人が、帝国主義文化を学び再獲得することで帝国主義宗主国の内側に入り込み、文化の自己完結性を打破する活動にサイードは抵抗の可能性を見出した。

だが、サイードのこうした展望に対し、「遡航」自体が帝国主義的な支配構造内での「サクセス・ストーリー」の第三世界版であり、支配構造自体は変えられないのではないか、という指摘もみられる。言いかえれば、被植民者知識人の「遡航」が可能なのは帝国主義文化の自己完結性を脅かさない範囲でしかないのではないか、という批判である(この批判は、たとえば現在のアメリカにおけるポストコロニアリズムの「体制化」にも関係する)。

私見では、こうした批判に対してなお「遡航」を抵抗の契機と見なしうるとするなら、「遡航」が単なる制度内的な寛容の産物ではなく、むしろ宗主国／植民地の二分法を越えたある種の普遍的な文化的価値をそれ自身で有していることを前提せざるを得ないように思われる。そして実際、晩年のサイードは本質主義批判を堅持する一方で、(宗主国文化には限らないが)文学作品の「美的な価値」について語っている。そこで、このような「価値」の導入が本質主義批判や言説分析といかなる関係にあるのかを検討したい。